

環境心理学再考：景観研究を中心として

著者	太田 裕彦
雑誌名	放送大学研究年報
巻	16
ページ	15-36
発行年	1999-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00007389/

環境心理学再考

—景観研究を中心として—

太 田 裕 彦^{*1)}

Environmental Psychology Reconsidered: with Focusing on Landscape Studies

Hirohiko OHTA

ABSTRACT

In the field of psychology, environmental psychology could be considered as one of the branches of applied psychology. However, looking from the viewpoint of engineering or geography for example, the birth processes of environmental psychology acquire different aspects. It is eminently valid to perceive environmental psychology as a large interdisciplinary area, that is widely embracing many fields as engineering, geography, sociology, biology, philosophy, etc.

But being interdisciplinary has brought about serious problems in environmental psychology. Environmental psychology as a whole is quite unstable as it has been influenced directly from the changes in each field consisting of the area, while paying a great price for its high flexibility as an academic area. There is a severer problem in Japanese environmental psychology. That is, the traditional vertically divided structures in Japanese universities greatly impede the free interdisciplinary exchanges in environmental psychology. And such structures could endanger the interdisciplinary conditions of environmental psychology by promoting fields of engineering to be self-sufficient.

Moreover, landscape study was selected for the subject of thinking more concrete problems in environmental psychology. In the field of landscape study there is a problem of theoretical division into professional, behavioral, and humanistic paradigms. Especially the dualism of "landscape vs. human" or "object vs. subject", that has been adopted traditionally in psychology and engineering, should be reconsidered for better future of landscape study. This dualism has been criticized from the monism by phenomenological geography as an example, and there is intimation as to the disunity of landscape study into dualism and monism. The concept of "trajection" is hoped to help us to bridge over such chasm.

^{*1)} 放送大学助教授 (発達と教育)

For the future interdisciplinary development of environmental psychology, psychologists should be free from the constraint of positivism, and psychology should play the role of mediator between various fields in environmental psychology or man-environment research.

要 旨

環境心理学は心理学の視点からは応用心理学の一分野とも考えられる。しかし工学や地理学といった環境心理学に大きく関わる分野から眺めるならば、その成立経緯は異なる様相を呈する。すなわち、環境心理学は単なる応用心理学の一つではなく、工学や地理学を始め社会学、生物学、哲学など広範な学問分野にわたる一つの学際的領域である。

しかし学際であるゆえに環境心理学が抱える問題点がある。すなわち、学問上の縛りが少なく自由度が高いことと引き換えに、構成分野の変動の影響を直接受けるなど領域全体の安定性は低い。さらにわが国で顕著な問題としては、大学組織の縦割り構造が分野間の学際的交流を阻んでおり、工学分野が環境心理学の中で自己充足化する危険を孕んでいる。

さらに環境心理学の中の景観研究を例に取り上げ、より具体的な現状と問題を考察した。そこでは心理学・工学・地理学を中心としたパラダイムの分裂という問題が存在する。今後の景観研究の展望を求めるとき、特に問題となるのが実証的研究を主体とする心理学や工学が採用してきた景観－人間という主客二元論である。この二元論に対する批判が地理学の特に現象学的地理学からなされているが、現状では二元論と一元論の両極に分裂する恐れがある。この二極分化を克服する上で例えば通態化の考え方は重要な手がかりを与える。

景観研究も含め今後の環境心理学の学際的发展のためには、心理学が実証主義に基づく科学的装いに固執せず、幅広い視点に立って諸学を結ぶ媒介的役割を担うことが求められる。

I. 環境心理学について

まずは、環境心理学という学際的な学問分野が成立した歴史的経緯を複数の視点からたどり、環境心理学の現状と問題を概観したい。

A. 「環境心理学」の定義と位置づけ

「環境心理学」という名前は「心理学」という語を含むことから、例えば「学習心理学」や「発達心理学」などのような呼び方と同様に、一般には心理学の中の一分野としてとらえられがちである。環境心理学の概説書に「環境心理学は心理学において、人間（動物も含む）とその環境との間の相互作用や関係性をとらえる分野」(McAndrew, 1993)と定義している例もある。環境心理学は特に交通心理学やスポーツ心理学などと同様に応用心理学の一領域とみなされることが多い。

一方、これとは対照的なとらえ方がある。同じく環境心理学の概説書でも、「環境心理学は多数の学問分野に根ざした研究分野であり、そこでは生物学、地学、心理学、法律、地理学、経済学、社会学、化学、物理学、歴史学、哲学などの分野、さらにはその下位の諸領域が人間と環境との関係性を理解するという関心を共有している」(Veitch & Arkkelin, 1995)というように、極めて多くの異なる分野からなる一つの学際領域としてとら

える例もある。これほど広い意味でなくとも、例えば建築学の立場から環境心理学を「環境をつくる学としての建築学と、環境が人間に及ぼす影響を扱う心理学の境界領域」(大野, 1996) とする定義も見られる。

このように現在「環境心理学」という名前で呼ばれるものは、心理学の中の一分野というように狭くとらえる場合と、複数の学問分野の間にまたがる学際領域として広くとらえる場合とに、大きく二分されるのが一般的である。このようなとらえ方の違いは、研究者の視点や依拠する学問分野の差異によって生じると考えられる。この二種類のとらえ方の妥当性を比較することは、現時点で環境心理学をとらえ直す上で先ず重要な問題である。そのための手がかりを求めるべく、そもそも「環境心理学」が成立した経緯を省みることとしたい。

B. 環境心理学の成立経緯

1. 心理学からのとらえ方

例えば先に環境心理学を心理学の一領域と見なしたMcAndrew (1993) は、以下のような経緯が環境心理学の成立の歴史であると認識している。

すなわち、心理学、地理学、建築学、社会科学など多くの分野で人間行動と環境との関係に興味を持たれていたが、その中でもゲシュタルト心理学が環境心理学の分野の重要な起源となった。知覚世界を近接や類同などの形で組織化しようとする人間の傾向をとらえていたゲシュタルト心理学から、環境世界の把握という問題が導き出されてきた。

特に社会心理学にゲシュタルト的視点をもたらし、のちに「グループダイナミックス」の分野を発展させたクルト・レヴィン (Kurt Lewin) は、個人の内面に環境がどのように表象されているかが生活空間における人間行動の決定の最大要因であると確信していた。

さらに、レヴィンのこの視点を弟子のバーカー (Roger Barker) およびライト (Herbert Wright) が受け継ぎ、第二次大戦以後に本格的な環境心理学の先駆けとして「生態学的心理学」がスタートすることになった。これは主としてバーカーの言う行動場面 (behavior settings), すなわち特定の時間・空間における行動の型を、地域社会などでの自然的観察に基づいて分類・記述していくものである。

ちなみに、この生態学的心理学の流れは、環境をマイクロ、メゾ、エクソ、マクロの4層システムとしてとらえているブロンフェン布伦ナー (Bronfenbrenner, U.) に引き継がれている (Cassidy, 1997; ウイッカー, 1994)。

その後、1960年代から70年代にかけて環境心理学がひとつの独自性をもった分野として確立することとなった。Cassidy (1997) によれば、それまでは学際性を反映した建築心理学 (architectural psychology) や心理学的生態学 (psychological ecology) あるいは生態学的心理学 (ecological psychology) などの名前でこの領域が呼ばれていたのが、1964年にIttelsonによってenvironmental psychologyという語が導入されて以来、独立した分野として確立することとなった。すなわち、出自の関係で社会心理学の影響が大きかった環境心理学は、徐々にそれ以外の心理学領域や建築学、社会学、地理学など他の学問分野から環境行動の研究者が生まれ出るにつれて、社会心理学的影響も薄れ、現在に至っている。

このように心理学の分野内に限定して環境心理学の成立経緯をまとめたとしても、最終

的には、心理学以外の分野からの環境行動研究が生じて学際領域へと拡大発展してしまう以上、環境心理学を心理学の一分野に限定することは現在ではやや困難である。ただし、心理学の立場から見れば、環境心理学はそもそも心理学にルーツを持ち、絶えず心理学がその中核を担ってきているのだ、というようにとらえることは自然な流れともいえよう。

2. 建築学からのとらえ方

次に建築学の領域との関連からとらえると、環境心理学の成立経緯はやや異なる様相を示す。例えば穂山（1982）によれば、1960～70年代に、工業化と経済成長に伴う自然破壊や公害問題、都市への人口集中、資源の枯渇など、いわゆる環境問題が世界的に顕在化し、環境に対する人々の関心が高まった。このような社会的背景のもとで1968年にアメリカで環境設計協会（Environmental Design Research Association：EDRA）が設置され、心理学・政治学・経済学・社会学・人類学・建築学・都市計画など広範な専門家によって組織化が図られた。またイギリスで1970年に国際建築心理学会（International Architectural Psychology Conference）の第一回大会が開かれた。これが環境心理学の実質的な成立と考えられ、環境心理学の成立は「心理学という学問の内的発展過程の必然の結果としてよりも、社会的要請として触発されてきたという傾向がある」（穂山，1982，p.238）という指摘がなされている。

Canter（1998）によれば、そもそも60年代当時の新世代の建築家たちが建築学的要請よりも住む人間の要求に重点を置いて設計を行うべきであると考え、精神医学や臨床心理学に素朴な期待を寄せる形で、建築心理学（architectural psychology）が生まれた。先述したようにこのころはまだ環境心理学という用語が導入されておらず、いわば揺籃期に建築家を主体にこのような学際的動きがなされていたことは、注目すべきことであろう。

ちなみにEDRA設立の後、1980年代には世界的に人間－環境研究の学際的組織が広まった。ヨーロッパでは1981年にIAPS（International Association for People-Environment Studies）が、オセアニアでは1980年にPAPER（People and Physical Environment Research）が設立された。また日本では1980年に最初の「人間行動と環境との相互過程に関する日米セミナー」が開かれたが、Yamamoto（1984-85）によればこれは日本の環境心理学にとってターニングポイントであり、その成果として1982年に人間・環境学会 MERA（Man-Environment Research Association）が設立された。

EDRA、IAPS、PAPER、MERAの4団体はセミナーの共催などの形で広く協力関係を持ちつつ、現在に至っている。これらの団体には工学、とりわけ建築学の分野から多数の研究者が参加しており、いずれも環境心理学という名称をとっていない。これは心理学が中核とはならず、さまざまな学問分野間の対等性を前提とするという意味合いが含まれていると解釈できよう。

以上のように、環境心理学の誕生に建築学が非常に大きく関わっており、現在もその影響力が大きいことが十分に窺える。

3. 地理学からのとらえ方

地理学の特に人文地理学の方面からは、地理学を中心に据えた形での環境心理学成立に

至る歴史的流れを読み取ることができる。

すなわち、第二次大戦後、人文地理学は計量革命(quantitative revolution)によって大きく変化し、1950年代から70年代にかけて論理実証主義が地理学において隆盛を極め、定量的なデータに基づく法則定立的な科学としての計量地理学が主流となった。その結果、景観や人間－自然関係といった伝統的なテーマはいわゆる「ユニーク」なものを扱っているということで記述的な非科学的地理学に含められていた(阿部, 1992; Walmsley & Lewis, 1993)。しかし60年代に一部の地理学者は心理学理論や研究方法に関心を示し始め、空間内で人間がすべて理性的に行動するわけではないことに気づき、計量地理学が展開していた数量的理論やモデルのステレオタイプの、機械的、決定論的本質に不満を抱くようになった(Kitchin et al., 1997)。

計量地理学に対抗し、1970年代初頭のアメロカにおいて人間＝主観の復権が唱えられるようになった(阿部, 1992)。特に60年代から70年代にかけて行動的アプローチに関心を持つ研究者は、認知心理学などからアイデアを引き出して環境の諸条件に適用することを試み、行動革命(behavioural revolution)の結果、多くの地理学者が心理学者と並んで研究をすることとなった。もともと人文地理学者は地図イメージや知覚世界、知覚空間定位、自然災害の認知など、人間の「主観的」世界に関心を持ち続けてきていた。ただ、行動的アプローチが人文地理学の中に確立したのはやはり60年代以降である(Walmsley & Lewis, 1993)と考えられている。

ところでこの行動革命は地理学の外部から攻撃を受けることとなった。すなわち構造主義者や人文主義者によって、行動的研究は機械的で非人間的であり、意思決定がなされる広範な社会的文化的文脈を無視している、というような哲学的批判がなされた。しかしこのようなレトリックの大半は、心理学の行動主義者(behaviorist)と地理学における行動的アプローチ(behavioral approaches)とを単純に混同し、行動主義的な実験操作という誤解を行動地理学者に押し付けるものであった。

この混同は今日に至るまで依然として地理学の一部の文献に認められる(Kitchin et al., 1997)。心理学の行動主義(behaviorism)と行動地理学における行動研究主義(behavioralism)とは基本的に異なる。前者は行動を刺激－反応に還元しようとするのに対し、後者は社会的に生み出された一連の束縛と間主観的に共有された環境の意味の中で人間のとる行動の決定様式、さらにはその決定に関わる態度、信念、価値など、人間が予め有する諸要因の意義も重視する(Walmsley & Lewis, 1993)。

この地理学における行動革命と同じ頃に、心理学者もそれまでの微視的環境からより大規模な環境や実験法以外の研究方法、特に生態学的妥当性の観点から、現場に出るフィールドワークにも関心を深めるようになった(Cassidy, 1997)。これが地理学と心理学の学際的浸透を進めることとなり、1965年アメリカ地理学会大会で学際的セッションが開かれ、さらに1969年のEDRA(Environmental Design & Research Association)の設立及び学際的雑誌Environment and Behaviorの創刊につながった(Kitchin et al., 1997)と地理学サイドではとらえている。

その後、学際的動きがやや停滞していくが、ここでも地理学の方から見れば心理学者が環境心理学を心理学自体の中のひとつの下部領域とすることに関心を示し、1981年にJour-

nal of Environmental Psychologyを創刊した(Kitchin et al., 1997)というようにとらえられている。

一方、行動地理学 (behavioral geography) においては内部抗争による分裂が始まり、さまざまな空間モデルの中で行動変数を扱うことに関心をもつ研究者と、空間分析を拒否して場所の感覚や価値、モラルなど現象学的研究に関心をもつ研究者に分かれてしまった(Kitchin et al., 1997)。

4. 学際領域としての環境心理学

以上のように心理学、建築学、地理学の3分野から環境心理学の成立経緯を振り返ってみるならば、環境心理学を形作る上で心理学が核として重要な役割を果たしてきたことは確認できる。しかし同時に、環境心理学は心理学の中の単なる一領域として単独に発生・成長したのではない、ということも明瞭である。この領域の成立経緯を知るならば、環境心理学は心理学、建築学、地理学をはじめ、都市計画、土木学、社会学、医学など多くの既存の学問分野から構成される一つの学際領域としてとらえる方がより妥当であろう。

ただし、現状では環境心理学を、「心理学の一分野あるいは心理学者を中心として構成されている領域」とする狭義と「様々な学問分野から構成される学際領域」とする広義の用法が併存している。これは環境心理学そのものの現状を反映しているのであろうが、当分は狭義か広義かを断りながら「環境心理学」という語を用いざるを得ない。本論文においてはこれより以降、特に断らない限りは「環境心理学」を学際領域という広義で用いることとする。

C. 環境心理学の現状と問題

環境心理学を一つの学際的分野であると理解した上で、環境心理学の現在の状況やその動向を把握し、また環境心理学の抱える問題について考えてみたい。

環境心理学の主要な研究領域の分類はやはり研究者によって異なるが、例えばIttelson et al. (1974) は次のような分類を行っている。すなわち、1) 環境の知覚、2) 人間関係と環境、3) 個人の発達と環境、4) 都市環境、5) 自然環境、6) 環境と設計、の6つである。

またMcAndrew (1993) やVeitch & Arkkelin (1995) は以下のようなより細かい分類を行っている。

- 1) 環境の知覚・認知：認知地図、経路探索などの問題
- 2) 大気環境：温度、湿度、光、日照、色、大気汚染、騒音などの問題
- 3) 環境ストレス：危険、自然災害、特殊環境などの問題
- 4) 社会的環境：パーソナルスペース、テリトリー、防衛行動、密度効果、都市化、プライバシーなどの問題
- 5) 労働環境：作業環境の問題
- 6) 学習環境：学校環境、社会教育施設環境などの問題
- 7) 居住環境：場所への愛着、近隣環境、住居デザインなどの問題
- 8) 自然環境：環境選好、自然景観、野外レクリエーションなどの問題
- 9) 環境問題：環境保全、エネルギー問題、環境教育、環境美学などの問題

これらは具体的な研究を行う際に対象となる「場所」による分類や、人間と環境の関係性の現われ方による分類、あるいは基礎と応用という分類など、さまざまな分類基準が混在したものとなっている。

この分野の多様性とも深く関連することであるが、環境心理学は現状では広く認められた普遍的理論を持たず、また研究分野としての統一もなされておらず、目的や方法、環境の規模の違いなど、さまざまな点において大きく異なっている (Ittelson et al., 1974; McAndrew, 1993)。これらが環境心理学の現在抱える諸問題を集約的に示しているといえよう。

ところで学際領域を構成する分野の間でその学際領域に関してどの程度共通概念や共通理解がもたれているのであろうか。先に分野ごとのとらえ方の概要を述べたが、EDRAの設立経緯ひとつ取ってみても建築学と地理学ではまったく異なる見方がされており、環境心理学の内容や成立経緯を自己の分野を中心としてとらえていることがよくわかる。

工学、地理学、心理学、あるいは医学などというように、一個の独立した分野の中に個々の細分化した下位分野を包摂しているところでは、内部領域の学問的な栄枯盛衰あるいは流行といった変動の有無にもかかわらず、全体としての「分野」は比較的安定して存続する。

しかしながら、環境心理学は様々な既存学問領域の一部ずつが互いに緩やかな接点を持つことで、かろうじて一つの学際領域として構成されている状態である。すなわち、環境心理学とそれを構成している分野との間での入れ子構造ないしは主従関係が存在しないため、領域全体にわたるアカデミックな縛りや制約のようなものが少ない反面、個々の研究者において学問的帰属意識のようなものも育ちににくいことが危惧される。そのために、構成分野の間でたやすく離合集散が起こりうるという、ある面では非常に自由な、しかし同時に極めて不安定な存在形態をとることになる。

そのため環境問題などといった社会的要請の時代的な変動や、それに伴う学問世界全体の動向の影響が、既存の伝統的な学問分野以上に環境心理学には大きく作用する。例えば Canter (1998) の視点によれば、1980年代に環境心理学の影響力が低下し研究の活性が頭打ちとなった頃、環境危機や災害などの社会心理学的研究が環境心理学において環境認知研究に代わって流行となった。それがおりからのアカデミックな心理学の復権とあいまって、環境心理学の研究者が自身の研究領域に応じて社会心理学や健康心理学など応用心理学の各分野へ移っていくという動きがあった。これなどは学際的領域のもつ不安定さを顕著に示すものであろう。

ただし、このおかげで環境心理学には人間と人工や自然の環境との関わりあるいは交互作用 (transaction) を探求する核となる環境心理学者が残り、そこに従来は周辺領域として存在していた社会学者が参加してくることにより、あらたなエネルギーを得て90年代に至っている (Canter, 1998)。これなどは学際領域の流動性がプラスの効果をもたらした例と見ることもできよう。

一方、この環境心理学における80年代までの基礎的研究から応用的問題への関心の広がり、人文主義的地理学において行動的アプローチを再活性化することに役立った (Wallsley & Lewis, 1993) というように、環境心理学を構成する本家への逆の影響も多少な

りとも認めることができる。

以上は欧米や日本など世界的に共通した状況であるが、日本の環境心理学においてはさらに異なる問題が存在する。それは大学組織の縦割りの弊害である。高橋（1985）が指摘するように、我が国で環境心理学あるいは人間－環境学と呼ばれる領域において突出した活動量を示しているのは、実は心理学ではなく建築学を中心とした工学系の研究者である。そして、欧米ならば心理学者や社会学者が担当すべき人間－環境系の基礎理論を、日本では工学出身者が自前で教育を担当し、工学系の教育・研究に心理学者ら他分野の専門家の関与する機会が少ない。

このような縦割りの学問体系に基づく大学組織の壁は、環境心理学のような学際領域における自由闊達な交流を阻む構造的要因となっている。個々の研究者は初めから環境心理学という学際的分野で生まれ育ってきたわけではなく、工学や地理学や美学、あるいは心理学など既存の縦割り学問体系の中の特定分野にその出自を持つ。そのため、現実問題として具体的な研究発表は出身母体分野における位置づけや関連性、つまりは出身分野での評価を、第一義に考えざるを得ない。縦割りの弊害はさらに、大学に環境心理学という学際的なコースを設置することを困難とし（Yamamoto, 1984-85）、学際的な研究の場を求めることの難しさが一層研究者を出身分野に縛り付けることになる。

これは学術雑誌を眺めるとよくわかることである。例えば日本の建築学分野の諸雑誌には、SD (Semantic Differential) 法や眼球運動記録など、実証的心理学において一般的に用いられてきた方法を採用した環境心理学的研究の例が多数報告されている。その量は心理学者が圧倒されるほどといえる。しかしこのような建築学方面の研究成果は、心理学の例えば「心理学研究」などにはまず掲載されないし、唯一学際的な報告の場であるMERA機関誌「人間－環境学会誌」でも絶対量は少ない。もちろん、その逆に心理学者が建築方面の雑誌に投稿することも少ない。

研究者の出自を中心としたアイデンティティと学際領域との関わりの中の葛藤という問題を解決することは、特に我が国の環境心理学において急務である。

学際性にまつわる問題としては、このほかに分野間の葛藤が挙げられよう。例えば地理学において若林（1993）は、地理学がこれまで実験的研究ではなく生態的環境における認知地図を対象としてきたが、近年心理学が生態学的研究を再評価するようになったために、地理学のアプローチの対外的意義（この場合は特に心理学に対する意義）を今後高めることが期待されるとしている。しかし、この点については、認知地図に関する実験的研究という圧倒的成果を携えた心理学が、さらに生態学のアプローチへの関心から実験室を飛び出すようになってきたことで、地理学の研究が埋没する危機感がより一層高まるという危機感（中村豊，1993）も表明されており、境界域での研究のオーバーラップは単純に喜ばしいことともいえない現状がある。

II. 景観研究について

前章で環境心理学の成立経緯や現況について概観したが、ここではさらにその中でも景観研究の領域を取り上げて、より具体的な問題を考えることとする。

そもそも「景観」という語は、植物学者三好学がドイツ語のLandschaftをこのように訳したのが始まりとされている^(注1)。また英語のlandscapeはオランダ語のlandschapを語源とするが、元は「地域、土地の広がり」といった意味から16世紀に風景画のジャンルを確立したオランダで「土地の風景を描いた絵画」という芸術用語としての意味に変わり、英語に導入されて1598年にはじめて使われた。その後30年余を経てlandscapeは「自然の風景」という意味に使われるようになったという^(注2)。

環境心理学において「景観」の持つ重要な意義は、「景観」が人と環境の相互作用を媒介するものである(榊原, 1992)という点である。とりわけ視知覚の領域においてこの媒介が顕著であり、例えば視覚像である風景をインターフェイスにすることで対象である自然を認知する(森下, 1992)といえる。

「自然」や「環境」というきわめて漠然として範囲も限定できない存在を、われわれが具体的に認識できるのは、そもそも景観がこのような媒介の役割を果たしてくれるからである。筆者はこの景観媒介論のレトリックを敷衍して、景観を研究することは抽象的な環境の研究をより具体的なものとするにとらえたい。

さらに、「景観」という言葉によって、都市や建築や土木や造園という個別領域の垣根が取り払われ、景観という共通の土俵が設けられた(樋口, 1995)という見方もなされている。すなわち、景観研究は環境心理学の学際性を顕著に反映している領域であるともいえる。

A. 景観研究のパラダイム3種

景観研究は環境心理学の歴史とともに歩んできた伝統的な領域であり、繰り返しになるが学際的特性が顕著に現われている領域である。しかしながらその学際性がいわば中途半端な状態であるために、逆に景観研究にさまざまな問題をもたらすこととなっているようである。特に1970年代後半より「景観研究とりわけ景観評価研究に統一的理论がなく各分野で個別に研究が進められている」という批判が起こり、その状況は近年においても変わっていない(Bourassa, 1990)。

その主たる要因は、研究者の出自である専門分野が種々雑多であり、専門分野に応じてそのめざす目標や採用する方法論等に相当の違いがあり、その間で相互交流を保つという本来の学際性が十分に図られてこなかったことである。

それと平行して景観研究の方法論もさまざまに異なっている。例えばDaniel & Vining (1983)は広範な領域における代表的なモデルを5種類取り上げ、特に景観評価における妥当性、信頼性、実用性、感度などを比較している。その5種類とは生態学的モデル、形式美学的モデル、精神物理学的モデル、心理学的モデル、現象学的モデルである。彼らはそれぞれの特徴や感度、妥当性、有用性、全体的評価を論じているが、それを筆者なりにまとめてみたのが表-1である。

これらのモデルはその出自を考えると大きく3種類にまとめることができる。生態学的

注1：世界大百科事典 日立デジタル平凡社1998による。

注2：The American Heritage Talking Dictionary Version 4.0, SoftKey International Inc., 1995. による。

表1 景観特性評価に関する5種類の方法論の諸特徴

方法論	特徴	感度・信頼度	妥当性	有用性	評価
生態学的モデル (Ecological model)	景観を動植物の種や生態域、遷移段階などにより特徴付ける。 人は辺縁に押しやられ、景観の利用者として汚染や自然破壊といった否定的作用をもたらす存在としてとらえられる。	かなり高い。	人に侵されていない無傷の「自然」地域が最高の景観特性を持つという前提に立つ。	景観特性と自然性との間の正確な関係は不明。 他の環境特性の諸評価と重複するため、景観特性評価を余分なものと思わせる恐れがある。	自然生態系は社会的価値や人間福祉などから独立した固有の価値を有すると考えることができる。 自然景観の価値は、安全、快適、慰安などの価値との総体的文脈の中に位置付けられる。
形式美学的モデル (Formal aesthetic model)	形、線、まとまり、変化などの形態上の属性により特徴付ける。	個々のエキスパートの判断に依拠するため正確度および一貫性が低い。	評価や測定に不向きである。	本質的に景観デザインのためのモデルとして最適。	景観特性評価に広く適用することには向かない。
精神物理学モデル (Psychophysical model)	客観的な物理学・生物学的用語で環境を特徴付ける。 写真などの手続きにより、特徴の客観的計測が可能。 人は観察者・判定者として景観を知覚し、景観特性を決定する好みや相対的評価を表明する。	正確度および一貫性が高い。	一般性に欠ける。 限定性が強く、特定の景観タイプや限られた観察者数、眺望に限られる。	環境の客観的な特性を体系的に評価できる点で理想に近い。	人の反応が単一の特性次元に限定されるのが弱点。
心理学的モデル (Psychological model)	複雑さ、神秘さ、明解さなど、人の判断に依拠した主観的用語で景観を特徴付ける。 人の景観経験の多次元的解析を強調する。	尺度値の標準誤差や偏差を算定し得ることから信頼度・感度は正確に決定できる。	景観利用者や一般大衆の好みは測定のための基礎として重要。 多彩な評価方法の間に一貫性がみられる。多次元評価が景観に対する人の自然な反応にどれほど近似するかが問題。	実際的あるいは理論的に有用となるには認知・感情・評価など心理学的次元の配列が、景観特性や好みの客観的指標や尺度と、体系的に関係付けられることが必要。	客観的景観特徴との明確な関係が明らかにならないと、景観に対する心理学的反応を別の心理学的反応で説明するという循環論に陥ることになる。
現象学的モデル (Phenomenological model)	個々人を景観特徴の主観的解釈者とみなし、その景観評価を尊重する。	感度を高めるために信頼度を犠牲にする。 個々の環境経験の間に一貫性は期待できない。	極めて特殊な個人的、経験的、情動的要素を強調することにより、景観の視覚的属性と景観経験との結び付きは不明瞭となる。 反面、客観的景観特徴を強調する他の方法に比べ、景観評価にとってより妥当な概念化をもたらす。	他の方法に比べて効用は低いかもしれない。 しかし、詳細に個人化された評価を景観評価の本来の目標と見なすならば、低効用であってもその必要性は高い。	景観に人が遭遇するというその人間的文脈の重要性を指摘する上で貢献する。

および形式美学的モデルは工学系に、精神物理学および心理学的モデルは文字どおり心理学に、現象学的モデルは地理学において、それぞれ中心的に依拠されるものである。

すなわち、先に環境心理学の成立を述べた際に、建築などを中心とする工学、そして地理学、心理学の3つを大きな構成分野ととらえたが、この構造的特徴は景観研究にも色濃くその影を落としており、これら3分野をそれぞれ中心軸として研究パラダイムが分裂している状況にある。

この3種のパラダイムは、Zube (1984) の命名に従えば、工学を中心とした実学的パラダイム (Professional paradigm)、心理学を中心とした行動学的パラダイム (Behavioral paradigm)、人文地理学や文化地理学などを中心とした人文学的パラダイム (Humanistic paradigm) となる。

実学的パラダイムは工学的パラダイムと呼んだほうがわかりやすいかもしれない。建築学、造園学や都市計画あるいは自然資源管理などの極めて実学的色彩の濃い分野におけるパラダイムで、「操作的景観論」と言い換えてもよからう。

すなわち、その大きな特徴は、景観を人間のために改変あるいは保全するという目的的な立場に立つ点である。景観を視覚環境として人間と物的対象との関連から把握し、人間の生理的、心理的側面に対する物的対象の働きかけを問題にする。そこでは人間の視点と対象との関係性を問うことが最も基本的な課題となっている。さらに、人間の評価を離れた景観というものは意味をなさず人間にとって価値をもつ景観の獲得が目的となる(篠原, 1977)。

この操作的景観論を代表し具現化する工学的景観論は、公共的広がりをもつ都市空間・田園空間・自然空間の視覚的側面の計画と設計を扱うことを終局的な目的とする技術体系である。そこでの具体的な操作対象とは、土木施設・建築物・植生・地形および観察者の視点と視軸方向である。

工学的景観論では景観対象自体が公共土木施設を中心とする工学的工作物が多く、とりわけ道路・橋梁・河川・港湾などを対象とする場合に「形態に関する議論はそれらの力学的特性や機能と無関係であり得ない」(中村良夫, 1977, p.8) とする点は、他のパラダイムと一線を画する大きな特徴である。

また景観操作の決定にあたっては、一般に対象となる空間のスケールが大きく、しかも現場で試行錯誤的に景観操作を行えないという制約も加わるため、可能な限り法則性に基づく意思決定を行うことが求められ、加えて対象が公共的性格を有するために決定には客観性が求められる(中村良夫, 1977)。

さらに工学的景観論では人間を一般的な視覚特性を持つ「抽象的な人間」として扱う。言い換えれば人間を単なる「視点」として設定する(篠原, 1977)。この点が行動学的パラダイムと大きく異なる点である。

次に行動学的パラダイムであるが、実験心理学を中心にいわゆる実証的科学的心理学が19世紀に始まって以来、心理学の主要な潮流が行動主義心理学から認知心理学へと大きく変化してきた経緯がある。心理学全般においてその時々で盛んとなる行動理論は、行動学的景観研究にも直接的に反映した。例えば刺激-反応理論、信号検出や覚醒理論、適応レベル、情報処理などのさまざまな理論や概念がこのパラダイムで用いられてきた(Zube,

1984).

行動学的景観パラダイムの具体的な理論としては、Kaplan & Kaplan (1978) の認知理論 (cognitive theory) と Ulrich (1983) の情動理論 (affective theory) が代表的なものである。認知理論は、「人間とは情報を探索する動物で環境はその情報源である」という基本的とらえ方に基づき、情報の豊かな (information-rich) 環境と情報の乏しい (information-poor) 環境に二分して景観を評価する。それに対し、情動理論は「環境への情動的反応のほうが認知プロセスよりも先行する」という考え方で、情動が景観評価の基盤ととらえるものである。

これら2つの説とも基本的には、環境が刺激を与え、人間がそれに対して反応するという構造をもつことに変わりはない。特にKaplanの弟子や孫弟子などその流れを汲む心理学者はアメリカの環境心理学の中で多数を占めており、景観嗜好を人間の生物学的特性と絡めてとらえる「認知理論」の影響力は相当大きいと考えられる。

Walmsley & Lewis (1993) が指摘するように、そもそも心理学は人間と環境の相互作用にあまり関心がなく、実験的アプローチの関係で実験室的単純世界の中で刺激と反応の単純な関係性へ還元してとらえてきた伝統がある。したがって環境は単なる刺激の複合であり、人間はその刺激複合に決定論的様式で反応するという視点は、心理学者とりわけ論理実証主義という主流に乗っている心理学者にとっては、極めて自然に取りうるものであったと思われる。

さらに人文学的パラダイムであるが、それを代表する地理学的・生態学的景観論は、工学サイドから中村良夫 (1977) や篠原 (1977) が指摘するように、実学的パラダイムとは際立った対照を示している。すなわち、地理学的生態学的景観論の主眼は、土地利用という形で現われてくる景観の把握を通じて、主体である人間と環境との連関構造をつまりは人間と自然の相互作用の内容を解明することに置かれている。そのため観察者の視点の位置を明確化する必要がなく、視点位置の変化による見えの変動というような現象は研究対象にならない。さらに現象としての景観は主体-環境連関の構造を把握する手段として用いられるのでそもそも美的評価を前提とはしない。

ところがこのような工学的視点からとらえられた地理学的景観論とはやや異なる現状が、地理学者とりわけ人文主義的地理学者の目には映っているようである。それは地理学における景観認知が貧弱なものとなっているという危惧である。すなわち、地理学における従来の景観論が可視的、形状の側面に研究対象を限定する傾向があった。そのために文化景観の形態的側面ばかりが過度に強調され、分析の関心が形態に関わる機能や構造に集中してしまうという結果を招いている (米田・瀧山, 1991)。

さらに、対象と距離を置く知的でクールな感覚である視覚を通じた景観認知は、分析的となるあまり逆に自己が世界と実際にどう関わっているかわからなくなり、景観のもつ豊かなメタファーをとらえられなくなっている (ポーティウス, 1992) という指摘もある。これでは地理学的景観論が目指すべき主体-環境の連関構造の把握が非常に皮相的なものとなる恐れがある。

このような問題を打開すべく、80年代以降には視覚以外の感覚による景観研究が試みられるに至った。すなわち、音環境を扱う soundscape や匂いによる空間知覚を扱う smells-

cape, 身体メタファーとしてのbodyscapeや心象風景としてのinscapeなどさまざまな様相における環境知覚, さらに文学作品に描かれた空間や場所に関する論及も試みられ, 「感覚地理学」という総称も提唱されている (Porteous, 1985; 米川・潟山, 1991).

また, 主体世界をより強く志向するのが例えばイー・フォー・トゥアン (1992) の「トポフィリア」などで知られる, 現象学的地理学の分野である. その特徴は「景観の理解は, 人間的な出来事の記憶と混じり合う時, もっと個人的で, もっと長続きするものになるのだ. またそれは, 審美的な喜びが科学的な好奇心と結びつく時, はかなさを超越するのだ.」 (トゥアン, 1992, p.164) という記述に象徴されよう. すなわち, 「客体である景観」対「主体である人間」という二元論に基づいて論理実証的に景観把握を行うのではなく, 人間主体を中心として景観が人間にいかなる意味をもつかを生活世界において現象学的にとらえようとするものである.

この「景観が人間にとって意味をもつ」ということを, 心理学や工学の方面においては景観という客観的実在があつてそれに主体である人間が意味を付与するという図式で理解するかもしれない. しかし, 阿部 (1990) の指摘によれば, それもまた「主観-客観」二元論のとらえかたに過ぎない. 現象学的アプローチでは主体による意味づけが主体にとっての事物のあり方そのものであり, 景観もまた主体にとって常に何らかの意味として与えられる. そこでは主体と景観は一体となって螺旋状に変化している, ととらえられている.

ただし生活世界という点に関連して, 今日のアメリカを中心とした地理学における現象学的見方はひとつの重大な問題を抱えている. すなわち阿部 (1992) によれば, 本来フッサールの言う生活世界とは科学的な活動と日常生活の両者を支えている地盤であるにもかかわらず, 地理学者は生活世界を日常生活と同一視してしまったために, 日常生活を入念に記述することが現象学的地理学と考えられている. その背景としては, 翻訳の問題もあつてフッサールやハイデッガーから直接現象学を取り入れず, 社会学や人類学, 心理学, 神学, さらに動物行動学, 生物学などを通じて間接的に受容したという点が挙げられている.

B. 景観研究の問題点と展望

以上3種のパラダイムに沿って景観研究の特徴および現状を見てきたが, このパラダイム間の差異は相当に大きく, その溝は簡単には埋め難いと思われる. しかしながら, 環境心理学を構成する諸分野で単に各々のパラダイムに基づいて景観研究を進めていくなれば, 環境心理学の寄り合い所帯的現状を維持するだけである. あるいは学問の縦割り構造が強い日本のような場合, 現状維持にとどまらず分野間の疎外を強化し, 逆に景観研究において学際性を弱める方向に向かう恐れもある.

1. 主客二元論の克服

景観研究ひいては環境心理学の学際性を高めるためには, 現状の景観研究に対する見直しを行わねばならない. 問題の根幹は, 「景観」と「人間」という語で表される二つのものをどのような関係づけでとらえるか, ということである.

この関係づけの仕方は学問分野や研究者によって異なるのであるが, そのバリエーショ

ンの両極として、一方には実学のおよび行動学的パラダイムで一般的な、「客体としての景観」を知覚・認識する「主体としての人間」という二元論的とらえ方があり、他方には人文学的パラダイムの現象学的アプローチに代表される「主客不分離」のとらえ方がある。

例えば

景観体験とはあくまでも対象によって喚起される知的、感情的な体験であるということができる。過去の出来事を思い出すような回顧的体験でもなく、主体の側にその契機のひとつがある幻想的な体験でもない。対象を見ることによって初めて成立する体験である。更に、美を中心に考察すれば、その体験は享受的なものであって、主体の想像力によって実体を創造する際に得られる体験ではない。すなわち、創作的な体験ではない。(篠原, 1977, p.93)

というようなとらえ方は、二元論的考え方の伝統的なものであり、研究者あるいは設計者の側で予め限定した範囲に「人間」を削って押し込めるものといえる。

しかし人間主体はこのような限定的な景観体験をするような存在ではない。景観対象に喚起される一方で、過去が想起・回顧されたり、連想などの面で想像力も働かせ、豊かな創作的体験が同時になされてもいる。したがって、先に景観と人間との関係性をどうとらえるかを問題としたが、それをさらに突き詰めると主体である人間をどのように扱うかという問題となる。いわば「環境心理学における人間観」の問題である。

しかし実学の分野における人間は、多くの場合きわめて無機的な存在でしかない。例えば景観工学では人間は視点場における視点として設定される。それは個々の人間がいまここに生きている世界における具体的時空間を超越した、いわゆる抽象的普遍的な視点である。また景観評価においては、「一般の人々」あるいは「平均的市民」と呼ばれる人間集団に総合的に評価させる、という形式を取る(小柳, 1977)。したがってこのような視点設定あるいは人間観を採用する限り、人間と景観との間に本来ある生々しい関係は捨象されてしまう。

やはり問わねばならないのは、実学やいわゆる「科学的」心理学の分野で採用している景観対人間という主客分離の二元論であろう。この問題に関して、現象学的地理学の方面からの批判を見逃すわけにはいかない。

例えば阿部(1990)は

景観は主体にとって知覚と実践の対象である。しかし、景観は実体的にも意味的にもつねに変化し、それは主体の意識の変化を伴っている。両者は単純な因果関係で結ばれているのではなく、あえていえば、一方は他方の原因でもあり結果でもあるという相互依存の関係である。つまり、主体と景観は一体となってつねに螺旋状に変化しているのである。この意味で、共時的な関係と同様に通時的な関係においても、やはり景観は主体の自己了解の表現であるといえる。(p.461)

と指摘している。

このような現象学的視点からの主張は、工学の方面でも一部前向きに受け止めていることが、例えば樋口(1995)の次のような記述から伺うことができる。「景観とは何なのか、これからの景観はどんなものなのか、現象学が教えるように、すべては私たちの景観経験の内側に隠されているはずである。景観という生の視知覚現象そのものをより深く追求し

ていかないことには、結局何も見えてこないということである。」(p.18)

これは他分野の知見を食欲に試行錯誤的に取り入れる実学の強みを示すものであり、少なくとも実学において人間主体の本来の重要性をとり戻す兆しとして注目すべきことではある。しかし、すべてが景観経験に隠されているというのは、主客二元論から主観一辺倒へと極端に振れ過ぎる恐れもある。

あるいは「分析的な景観論と、認識論に近い総合化していく風景論」(小林ら, 1995)とるように、今後の景観研究は二つの極に分化して進められるのかもしれない。

ところで、同じく現象学的地理学の中でも微妙に視軸の異なる見解も見受けられる。例えばベルクは景観対人間という二元論を克服するにあたり、風景の感覚的表現としての「風土」の見直しを提唱している。すなわち、

人間的主体を前提とする「風土」は、科学が客観的に考察するものとしての自然環境とは全く異なるものです。とはいっても、「風土」は主観的な幻想などではありません。それどころか、風土の諸現象を具体的に経験する私たちにとっては、風土こそ私たちの環境の現実そのもののなのです。(ベルク, 1995, p.3)

その上で彼は、主観的なものと客観的なものとの理論的区別を跨ぐものとして「通態化」という概念を提唱している(ベルク, 1994, 1995)。

通態化とは<中略>現実には純粋に客観的なものでも純粋に主観的なものでもなく、主観(個人の主観だけでなく、ひとつの社会の主観、あるいは人類全体の主観も含みます)と客体との相互関係によって空間と時間のなかに構成されるものであるということです。(ベルク, 1995, p.14: ()内は原文のまま)

実際の風土の中では、環境を形作るさまざまな物は単にそれ自体として(客観的に)存在するのでも、人間の精神の中だけに(主観的に)存在するのでもありません。それらは通態的に、資源や制約や危険や楽しみとして存在するのです。即ち、それらが取り巻く社会との関係においてのみ存在するということです。(ベルク, 1995, p.55: ()内は原文のまま)

現状では景観研究が主客分離の二元論と主観中心の一元論という二極に分裂する可能性が強い。しかし景観について「外的な事象か内的な心象かという二者択一的な問いは、むしろその本性を見失わせる」(中村英樹, 1992, p.148)ものである。このような不毛な二極分裂を避けて景観への本質的アプローチを求める上で「通態化」は重要な視点であると筆者は考える。

この通態化は単純化するというならば関係性ということにつながる。人間主体にとっての関係性を通して景観は存在し意味を持つものである。この景観と人間との関係性を具体的にとらえる上で中心となるのは、人間の個人としてあるいは集団としての記憶や歴史性であろう。

すなわち、景観とは現前の景観の知覚されたものであると同時にまた記憶された景観でもある。中村英樹(1992)の述べるように、「今見ている風景だけでなく、幼時や少年時代以来の体験や記憶が積み重なり、溶け合い、現在とも交錯して、私たちの風景を形成する(p.152)」のである。

このような考え方は既に都市計画の分野においても見受けられる。例えば高谷(1985)

は「人々は単に今現前する道筋の見え方だけではなく、今までの様々の景観体験の集積として景観のイメージをつくり出しているのである」(p.19)と指摘している。

また筆者自身、自然の諸景観を題材として人はどのように景観をとらえているのかという問題に関して定性的研究を行ってきた(太田, 1997a, 1997b, 1998)。具体的には自然風景写真を呈示しつつ、調査対象者が抱く第一印象や想起、連想、評価、さらには経験などを半構成的インタビューによって尋ねた。結果を分析・総合することで対象者の表層的な違いを超えて次のような基本的共通性が浮かび上がった。

- 呈示された風景の中に存在しない事物やそこから直接は知り得ない情報を、個々人が特有の方法でしばしば風景に付与していた。付与される内容は個人の過去記憶、とりわけ現実場面での具体的体験と強く結びついている。
- この場にいたらどうするかという風景への動的参与については、個人の記憶・経験や嗜好などが直接あるいは変形されて題材として利用されていた。
- 上記の事物や情報の付与、および動的参与においては視覚に限らず、聴覚（せせらぎの音や鳥のさえずり）や触覚（水や草に触れる）あるいは皮膚感覚（風のそよぎや体感温度）など多彩な感覚モダリティと結び付けられる。
- 同一のインフォーマントであっても、自分自身の実体験と結びつく風景ほど一体化しやすく、逆になじみの薄い風景ほど客観的にあるいは単なる写真としてとらえる傾向があった。
- 自然風景から受ける印象や評価、あるいは風景への動的参与や連想などは、都会の中の職場や家庭を中心とした日常生活と対比した形で語られることが多い。またとりわけ、本人が現在抱いている日常生活場面での問題や関心が、風景のとらえ方にしばしば反映した。
- 呈示した風景写真は自然のごく一部のみを写したものであるにもかかわらず、そこから自然全般、さらには地球全体にまで拡大した形で言及がなされることがあり、その際にインフォーマントなりの自然観が語られることが多かった。
- インタビューが進行する過程で、新たな記憶が再生されたり異なる連想が生まれることにより、風景の印象や風景との一体感などが動的に変化した。

さらに全体的な自然景観認知の構造を示すと、図-1のようにまとめることができる。すなわち、個々の風景を前にして対象者個々人の持つ記憶や背景が活性化され、それが評価までを含む景観の認知全般を規定していた。特筆すべきは対象者の個人的記憶、とりわけ自伝的記憶 (autobiographic memory) が大きな影響を及ぼしていたことである。自伝的記憶は情動との結びつきを強く示すものであり (Amedeo, 1993)、風景に対する印象や評価などの情動的側面との関連は非常に興味深いといえよう。

以上のように、個人のレベルであれ集団のレベルであれ、記憶や歴史といった経験情報の蓄積を軸として、景観と人間との関係性あるいは通態化を視点に据える景観研究を今後とも展開していくことが重要であると考え、それが主客二元論を克服するあるいは主客二元論と主体中心論の二極分化を超える、景観研究の今後進むべき方向であろう。

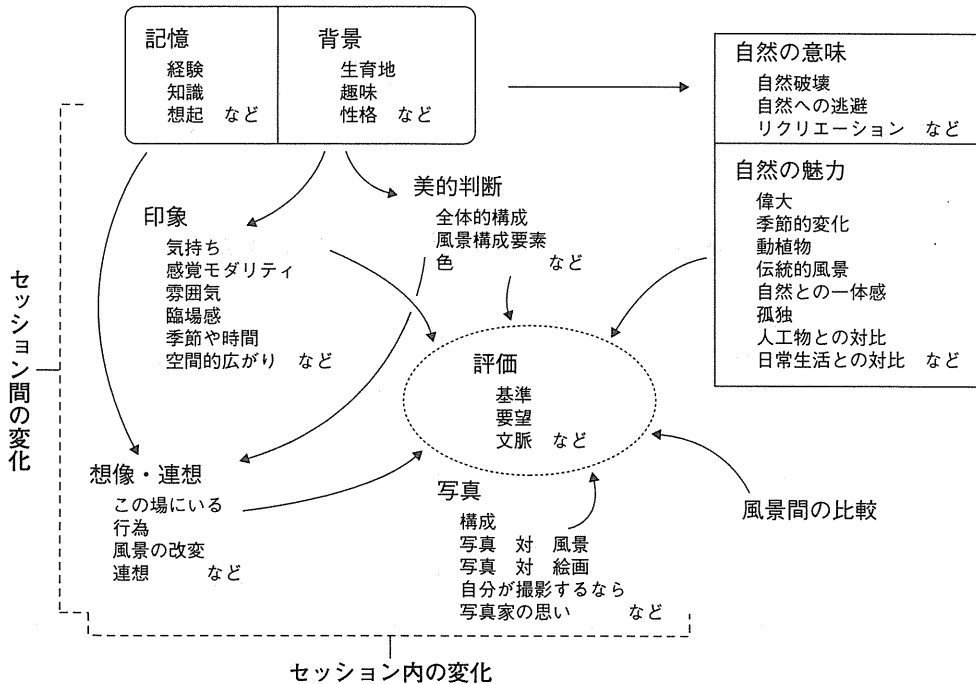


図1 自然風景認知の全体的構造

2. 学際領域における問題

これは景観研究に限らず環境心理学全般にいえることではあるが、隣接する他分野の知見を取り入れて用いるということは学際領域において頻繁に起こり得ることであるし、また一般論としては促進されるべきものである。

ただし、その際に十分な検討もなく安易にその知見を導入してしまう危険性がある。その一例として、黄金比を取り入れることで構造物やそれを取り巻く景観の心地よさを得る（小柳, 1997）という景観工学における考え方を挙げることができよう。

これは特に景観工学に限ったことではないが、心理学とりわけ実験美学を通じて流布されている「黄金比が美的好ましさを高める効果を持つ」という命題は、その真偽が確認されないまま一般に信じ込まれているようである。しかし、黄金比の美的効果は確定されたものではなく、実験美学の世界においてはいまだ賛否両論、もしくは大勢としては否定されている状態である（例えばBoselie, 1992; Green, 1995; Nakajima & Ohta, 1989; 太田・中島, 1989; 太田・中島・山崎, 1991）。

もちろん同様の問題は例えば心理学が景観工学の知見を逆に取り入れる場合にも起こり得るわけである。ただ実学的性格の強い工学においては、他学問分野の知見や手法を積極的に取り入れて試行錯誤的に実際場面に適用するという傾向があり、それが工学の強みでもあるのだが、こういった問題は特に実学分野において多発する可能性が高いと思われる。

したがって常識論としては、協同研究やアイデアを借用する形で研究を始める前に、お

互いの理論や方法論の誤用や濫用を防ぐために、分野間の協同を慎重に進めなければならない (Kitchin et al., 1997)。しかし協同そのものを阻む障害として、特にわが国では大学の縦割り組織が存在する。この縦割りに伴って蛸壺化せざるを得ないわが国の環境心理学の構成諸分野は、今後も理論等の誤用や濫用という深刻な問題を抱え続けることであろう。

III. 環境心理学における心理学の現状と今後

これまでに述べてきたことからわかるように、環境心理学は心理学の占有領域ではなくひとつの大きな学際領域であり、工学や地理学などの諸分野を出自とする研究者も環境心理学的研究を推進し、環境心理学に対し非常に大きな貢献を果たしている。

しかしながら翻って心理学はどうであろうか。心理学を出自とする筆者にとっては、「心理学」という語が含まれているにもかかわらず環境心理学における心理学の存在感が希薄に感じられる。

実際には、環境心理学のさまざまな研究活動が心理学者によっても展開されているのであるが、建築学や都市計画などの方面の学術雑誌を覗き見ると、心理学者の研究と区別がつかないほどに「心理学的な」実験研究や調査研究が目白押しに並んでいるのに驚かされる。特に景観研究においてはその感が強い。

もちろん、表面的には似ていても力点の置き方が工学と心理学とでは微妙に異なるようではある。例えば建築学の立場から大野 (1996) は、アメリカの環境心理学者の研究の多くは知覚情報を受け取ったあとの認知過程に重点を置き物理的環境の記述に不熱心であり、そのような研究姿勢は具体的な物理的環境に関心がある建築サイドの研究者としては追従しがたい、と述べている。

このような差異はあるにせよ、心理学と工学の具体的研究のオーバーラップは極めて大きい。そもそも環境心理学が学際領域である以上、分野の違いを越えて研究が類似したり重複したりするのは当然であり、またとらえようによっては望ましいことかもしれない。実験心理学に代表されるように心理学の主流派が自然科学的装いを凝らしていたからこそ、工学系の分野との学際的交流が円滑に進んだとも考えられる。そもそも「刺激-反応」系でとらえてきた心理学が、環境心理学においても「刺激としての環境とそれに反応する人間」という図式を持ち込んできたことが、主客二元論を中心とする建築学や造園学などの実学の分野との交流、あるいは工学における一方的な取り込みを円滑にしたと考えられる。

しかしながら、はたしてこのままでよいのであろうか。工学を中心とした自然科学的色彩の強い分野において、圧倒的な量で実証的客観的な環境-人間研究が進められている状況の中で、心理学自体が同様の客観主義路線を歩み続けるならば、力点の置き方のわずかな差異にその独自性を示す程度で、全体としては心理学の研究が工学などの研究の中に埋没してしまう危険がある。

また一方、地理学の分野との関係でいえば、現象学的地理学など人文主義的地理学の方が人間の生活世界における生き生きとした内面性を積極的に扱っているのに対し、本来人

間の心を扱うべき心理学であるにもかかわらず、心理学分野の研究の多くは悪しき実証主義によって人間主体のもつ生々しさを排除する方向で進んできた。

人間の内面世界は地理学に任せておけばよいというものではない。同じ内面世界といっても、主体である人間の個人と集団といったレベルや、扱う環境のスケールなど、地理学と心理学とでさまざまな差異が存在する (Kitchin et al., 1997) のであり、それぞれが得意とする中心的領域があろう。そこにおいて心理学の独自性を打ち出した研究を模索すべきである。

このままでは環境心理学において心理学の独自性を強く示すことができなくなる恐れがある。皮肉なことにわが国の大学における組織の縦割り構造が、逆にこのような心理学の存在の仕方を保障する作用を果たしてきたのかもしれない。

しかしこの縦割りの壁は今後も心理学を守る障壁でありつづけるとは限らない。わが国の工学を中心とした実学分野が貪欲に他分野の知見を吸収応用していくことで次第に自己充足的な形で学際的となってゆき、ついには環境心理学あるいは人間・環境学の世界が実学によって席捲され、心理学や地理学などは周辺領域化することも考えられる。

心理学が独自性を高めることはその存在意義も高まることにつながる。すなわち独自の視点を持つことによって、はじめて他の分野の研究を鋭く批判できるのである。実学分野がもしも暴走することがあった場合、現在の心理学はそれに対して有効な批判ができるであろうか。

例えばマーサー (1979) は、「高層住宅という都市化が将来とも不可避の趨勢であるならば、都市化が人間にどのような悪影響をもたらすか」という伝統的問題を環境心理学が設定するのではなく、そのような都市化に人間が適応するのを妨げる要因は何かという具体的方策と結びついた問題に取り組む必要があると述べている。

このように、人間が都市環境に適応することを積極的に支援することは、未来志向的で積極的な姿勢を評価されるかもしれないが、視点を変えればこれは実学に擦り寄る非常に危険な方向である。はたして人間の生物基盤が無限の適応可能性を持っているとみなしてよいか、はなはだ疑問である。将来的に都市環境そのものが人間の持つ適応可能性の範囲を大きく逸脱していくならば、そのような都市への適応を積極的に支援することが、逆に人間の生存を危うくすることにつながる。したがって少なくとも心理学は「都市化の抱えている否定的側面を問う」という伝統的問題設定を安易に捨て去ってはならない (太田, 1996)。

さらにこのような蝸壺化の状況が続くと、欧米で進む環境心理学の学際的状況とそこから生じる学際的知見は日本に輸入されるが、その知見を参考に「欧米産の学際性」を盛り込んだ研究が日本ではそれぞれの分野で独立して進むだけとなる。言い換えれば、分野間の交流は細々としたまま欧米の研究を介した間接的な形でのみ日本の環境心理学の学際性が保証されていく、ということにもなりかねない。

筆者は今後客観的科学的心理学が無くなればよいといっているのではない。研究が実証的、客観的、あるいは主客二元論の視点に偏り過ぎることはが環境心理学にとって問題であるということである。人間主体の内面世界に光を当てることは心理学の本来果たすべき役割であり、その役割を果たすためには、景観研究においても触れたような通態化や関係

性という視点をより積極的に採用すべきである。

加藤(1995)は空間研究について、心理学においてこれまで切り捨てられてきた人間と空間との意味的関わりの問題を本格的に研究すべきであると主張しているが、これはひろく環境心理学全般に当てはめ得る問題である。要するに環境は客体の問題ではなく意味の問題であり、人間は意味を媒介として外界と関係を結ぶ(瀬尾, 1981)という視点を基軸に据えるべきである。

さらに主客二元論対一元論という図式に関連することであるが、環境心理学における人間のとらえ方として「環境に決定される存在」対「環境の中で自由意志を有する存在」あるいは「受動的存在」対「能動的存在」という対立図式がある。従来は「主客二元論で環境決定論にもとづく受動的存在としての人間」というのが環境心理学において一般な扱われ方であったが、今後は「環境との相互作用の中である程度の自律性を発揮し、自己の経験への意味付与を通じて内面世界を構築するような、能動的な人間」(Cassidy, 1997)として扱われるべきであろう。

さて今後の環境心理学において心理学は独自性を打ち出す一方で、さらに分野間の媒介という役割を果たすべきではないか。心理学は19世紀に物理学に代表される自然科学をモデルとして科学的心理学の確立を目指して以来、行動主義心理学や認知心理学など今日に至るまで実証主義的立場に立つ分野が主流として存続してきた。その一方で臨床心理学など解釈主義的な立場の分野もしっかりと根を張っている。このように良かれ悪しかれ心理学は幅広い多様な視点を内包する学問分野となっている。

したがってこのような特性を背景として、自然科学である工学系と人文科学である美学、さらに自然科学と人文科学の両側面をもつ地理学などの諸分野の間を媒介することは、環境心理学の学際性を実り多いものにする上で心理学が果たすべき重要な役割ではないか。ただし心理学だけが中核を担うわけではなく、諸分野が互いに重複を持ちつつ寄り集まるという構造とならねばならないのは、言うまでもないことである。

引用文献表

- 阿部 一 「景観・場所・物語」 地理学評論63A-7: 453-465, 1990.
 阿部 一 「イーフォー・トゥアンの景観」現代思想20-9: 73-79, 1992.
 穂山貞登 「環境の社会心理学」乾 正雄・長田泰公・渡辺仁史・穂山貞登共著 『新建築学体系11環境心理』彰国社, p.235-296, 1982.
 Amedeo, D. "Emotions in Person-Environment-Behavior Episodes", in Gärling, T. & Golledge, R. G. (eds.) *Behavior and Environment: Psychological and Geographical Approaches*, Elsevier Science Publishers B.V., pp.83-116, 1993.
 ベルク, A. 『風土としての地球』三宅京子訳 筑摩書房, 1994.
 ベルク, A. 『日本の風土性』星埜守之訳 日本放送出版協会, 1995.
 Boselie, F. "The golden section has no special aesthetic attractivity!", *Empirical Studies of the Arts*, 10: 1-18, 1992.
 Bourassa, S. C. "A paradigm for landscape aesthetics", *Environment and Behavior*, 22: 787-812, 1990.
 Canter, D. "Editorial - A New Awakening", *Journal of Environmental Psychology*, 18: 1-2, 1998.

- Cassidy, T. *Environmental Psychology: Behaviour and Experience in Context*, Psychological Press: East Sussex, UK, 1997.
- Daniel, T.C. & Vining, J. "Methodological Issues in the Assessment of Landscape Quality", In Altman, I & Wohlwill, J. (eds.) *Behavior and the Natural Environment*, pp.39-84, 1983.
- Green, C.D. "All that glitters: a review of psychological research on the aesthetics of the golden section", *Perception*, 24: 937-968, 1995.
- 樋口忠彦 「日本的景観論の現在」都市計画vol.196: 15-18, 1995.
- 石川義孝 「わが国における計量地理学の回顧と今後の課題」人文地理45: 42-65, 1993.
- Ittelson, W.H., Proshansky, H.M., Rivlin, L.G., & Winkel, G.H. (eds.) *An Introduction to Environmental Psychology*, New York: Holt, Rinehart, & Winston, 1974.
- Kaplan, S. and Kaplan, R. *Humanscape: Environments for People*, North Scituate, MA: Duxbury Press, 1978.
- 加藤義信 「空間認知研究の歴史と理論」空間認知の発達研究会編『空間に生きる—空間認知の発達の研究—』北大路書房, p.220-249, 1995.
- Kitchin et al. "Relations between psychology and geography", *Environment and Behavior*, 29: 554-573, 1997.
- 小林・篠原・進士・鳴海・西村 座談会 「景観研究と景観創造」都市計画 196: 6-14, 1995.
- 小柳武和 「景観評価論」土木工学体系編集委員会編 『景観論』 pp.281-324, 1977.
- 小柳武和 「景観工学 (景観工学の基礎理論と手法)」道家達将編 『先端工学』放送大学教育振興会, 1997.
- マーサー, C. 『環境心理学序説』永田良昭訳 新曜社, 1979.
- McAndrew, F.T. *Environmental Psychology*, Pacific Grove, California: Brooks/Cole Publishing Company, 1993.
- 森下嘉公 「風景成立のプロセスについて —18世紀ドイツの風景感情を手がかりにして—」神戸学院大学人文学部紀要, 4: 169-180, 1992.
- Nakajima, Y. & Ohta, H. "Effect of golden ratio on the beauty of double concentric circles", *Perceptual and Motor Skills*, 69: 767-770, 1989.
- 中村英樹 「古典的知覚を超える風景」現代思想20-9: 148-161, 1992.
- 中村良夫 「景観原論」土木工学体系編集委員会編 『景観論』彰国社 pp.1-31, 1977.
- 中村 豊 「若林芳樹: 認知地図への地理学的アプローチ」座長所見 人文地理45: 98-101, 1993.
- 大野隆造 「空間体験の諸相—多感覚の環境知覚—」中島義明・大野隆造編『すまう—住行動の心理学—』朝倉書店, pp.7-25, 1996.
- 太田裕彦 「子どもの発達と住環境」中島義明・大野隆造編『すまう—住行動の心理学—』朝倉書店, pp.194-209, 1996.
- 太田裕彦 「自然景観の認知に関する定性的研究の試み」日本心理学会第61回大会発表論文集p.20, 1997a.
- 太田裕彦 「人は自然景観をどのようにとらえているのか」日本人間性心理学会第16回大会発表論文集p.46-47, 1997b.
- Ohta, H. (1998) "A qualitative study on the cognition of natural landscapes", 24th International Congress of Applied Psychology, Session No.4005, 1998. (ref. Search in 24th International Congress of Applied Psychology, <http://www.ucm.es/info/Psyap/24ICAP/busqueda.htm>).
- 太田裕彦・中島義明 「黄金分割への実験心理学的接近」大阪大学人間科学部紀要15: 189-206, 1989.
- 太田裕彦・中島義明・山崎晃男 「黄金分割をめぐる先駆的研究」大阪大学人間科学部紀要 17: 71-89, 1991.

- ポコック, D. 「はしがき」 米田 巖・潟山健一訳編『心のなかの景観』古今書院, pp.i-vi, 1992.
- Porteous, J.D. "Smellscape", *Progress in Human Geography*, 9: 356-378, 1985.
- ポーティウス, J.D. 「はしがき」 米田 巖・潟山健一訳編『心のなかの景観』古今書院, pp.vii-xi, 1992.
- 榊原和彦 「都市景観」中村英夫編『都市と環境』pp.208-215, 1992.
- 瀬尾文彰 『意味の環境論—人間活性化の舞台としての都市へ—』彰国社, 1981.
- 篠原 修 「景観体験と景観の操作」土木工学体系編集委員会編『景観論』pp.33-126, 1977.
- 高橋鷹志 「環境心理学—建築の計画理論の糧として」理想625巻p.151-159, 1985.
- 高谷時彦 「都市景観への視点 都市景観研究の意義と役割—都市設計の立場から—」都市計画138: 18-22, 1985.
- トゥアン, イー, フー 『トポフィリア』小野有五・阿部 一訳 せりか書房, 1992.
- Ulrich, R.S. "Aesthetic and affective response to natural environment", in Altman, I & Wohlwill, J.F. (eds.) *Behavior and the Natural Environment*, Plenum Press: New York, pp.85-125, 1983.
- Veitch, R. & Arkkelin, D. *Environmental Psychology: An Interdisciplinary Perspective*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, 1995.
- 若林芳樹 「認知地図への地理学的アプローチ」人文地理45: 98-101, 1993.
- Walmsley, D.J. & Lewis, G.J. *People and Environment: Behavioral Approaches in Human Geography*. 2nd ed., New York: Longman Scientific & Technical, 1993.
- ウィッカー, A.W. 『生態学的心理学入門』安藤延男 訳, 九州大学出版会, 1994.
- Yamamoto, T. "Current Trends in Japanese Environmental Psychology", *Hiroshima Forum for Psychology* 10, 61-69, 1984-85.
- 米田 巖・潟山健一 「人文主義地理学の新しい潮流」人文地理43: 546-565, 1991.
- Zube, E.H. "Themes in landscape assessment theory", *Landscape Journal*, 3: 104-110, 1984.

(平成10年11月11日受理)